

【資料】

SDGs を基盤とする教育課程の構築について

——大学として育成したい人材像とは——

橋 村 勝 明

Building a Curriculum Based on SDGs: The Image of Human Resources
We Want to Develop as a University

Katsuaki Hashimura

1 はじめに

近頃「SDGs」というワードを様々なメディアを通じて目にする機会が多くなってきたように感じる。しかしながら、SDGs（持続可能な開発目標）そのものは2015年9月に国連において合意採択されたものであり、既に6年を経過している。朝日新聞によるSDGsの認知度調査では、2020年2月時点での認知度が32.9%であったのに対して同年12月時点では52.7%となっており¹、短期間で関心の高まりが伺える。このような高まりの背景には連日報道される各国のcovid-19感染状況と、それによって分断された社会を改めて捉え直し、共通の目標によってつなげようとする意識があるのかもしれない。

このような状況を踏まえ、以下に高等教育はSDGsといかに向き合えるのかということについて考察を進めたい。

2 国際社会の情勢と日本国政府の取り組み

2018年11月に公表された、『2040年に向けた高等教育のグランドデザイン』（中央教育審議会答申）においては、以下のように20年後の社会を逞しく生き抜く教育が求められている。

2. 2040年頃の社会変化の方向

現在、国連をはじめ、様々な立場から、将来社会の予測や、あるべき社会の実現に向けての議論と努力が始まっている。その幾つかの議論を整理すると、2040年の社会変化の方向の一端は、以下のように示すことができる。

その変化の方向の一つとしてSDGsを挙げ、以下のように説明している²。

また、SDGsで掲げられている課題に関して、自らの問題として捉え、身近な所から取

1 https://miraimedia.asahi.com/sdgs_survey07/

2 変化の方向としては、他に「Society5.0、第4次産業革命が目指す社会」「グローバル化が進んだ社会」「地域創生が目指す社会」を挙げている。フィリピン国への留学は、「グローバル化が進んだ社会」にも対応しうるものであるが、本稿では確認にとどめる。

り組む (thinkglobally, actlocally) ことにより、それらの課題の解決につながる新たな価値観や行動を生み出し、持続可能な社会を創造していくことを目指す学習や活動である「持続可能な開発のための教育 (ESD)」も行われている。SDGs を達成するための ESD の推進と、SDGs の目標達成と相まって、全ての人が必要な教育を受け、その能力を最大限に発揮する社会の到来が期待される。

また、現在日本国政府は、以下に掲げるように SDGs³を推進し、また高等教育における取り組み事例を公表することによって更なる展開を期待している⁴。以下にその趣旨を掲げる。

持続可能な開発目標 (SDGs) とは、2001年に策定されたミレニアム開発目標 (MDGs) の後継として、2015年9月の国連サミットで採択された「持続可能な開発のための2030アジェンダ」にて記載された2016年から2030年までの国際目標です。持続可能な世界を実現するための17のゴール・169のターゲットから構成され、地球上の誰一人として取り残さない (leave no one behind) ことを誓っています。SDGs は発展途上国のみならず、先進国自身が取り組むユニバーサル (普遍的) なものであり、日本としても積極的に取り組んでいます。

このような動向を受け、多くの大学が SDGs に対して積極的な取り組みを実施している。例えば 金沢工業大学は「SDGs 時代のグローバルリーダーの育成～学生一人一人に対して最適な教育を～」をテーマに掲げ、以下のような体系的教育を展開している⁵。

ESD の実践

SDGs に特化した通年カリキュラム

学生の主体性を引き出す教育 (学生主体=自ら学び行動する)

SDGs プロジェクトのベースとなる技術者倫理

地域の課題解決及び地域再生・地方創生との関係

周辺の自治体との密接な連携 (社会実装)

SDGs 教育の展開 (ユース世代への波及)

プロジェクト型学習

学部学科を超えた全学体制の貢献 (教育優先)

SDGs が掲げる持続可能な開発目標には、例えば目標 4 「すべての人に包摂的かつ公正な質の高い教育を確保し、生涯学習の機会を促進する。」が掲げられており、このような精神は広島文教大学 (以下、本学) の建学の精神である「育心 育人」を教育学部の人材育成目標に具現化したものであると捉えることができる。

平成27年9月に公表された「平和と成長のための学びの戦略～学び合いを通じた質の高い教育の実現～」(日本国政府) では、「教育は、他者や異文化に対する理解と信頼を育み、平和を支える礎ともなる。」としている。高等教育は、単に専門的職業的知識を教授するということが最終的な目標たり得ず、その先には国際社会における相互理解と信頼に基づく平和の構築が求

3 Sustainable Development Goals

4 http://www.mext.go.jp/unesco/sdgs_koujireisyu_education/1418146.htm

5 http://www.mext.go.jp/unesco/sdgs_koujireisyu_education/detail/1418152.htm

められよう。そのような目的を設定する上では、既に多くの大学で実施されている留学プログラムの意義は大きい。

このような留学プログラムが設定される背景にはグローバル人材の育成が求められていることにある。そして、高等教育において国際化が議論される際には、グローバルとローカルとが対立的に捉えられ、教育目標を国際におくか、国内におくかという二者択一的な議論が展開されてきたように思う。また、第3の選択肢としてグローカルという造語によって大学の教育を位置づける試みもなされてきた。それは、おそらくグローバルという語の指し示す範囲が全世界を含み混んでしまうために、「高等教育のグローバル化」という表現を、例えば本学のような中小の大学にとって非常に使いにくいものとしているのではないかと考える。ただ、実際にはグローバルという概念とは国内か全世界かではなく、東アジア、環太平洋、中東を含むアジア全域などという複数の地域的な枠組みを想定することができよう。SDGsに限定して言えば、その目標を達成しようとする心を育むために、全世界を想定する必要などは全くなく、むしろ相互理解と信頼が得られる地域とパートナーシップを構築し、共に目標に向けて社会の問題を解決することが重要であると考えられる。

では、相互理解と信頼が得られる地域とは具体的にどこになるのか、ということについては株式会社電通が実施した「ジャパンプランド調査2018」のデータが参考となろう⁶。

① 日本に対する好意度 ランキング トップ10

問) 日本のことが好きですか。

(5段階「とても好き・まあ好き・どちらとも言えない・あまり好きではない・まったく好きではない」)

順位	2018年	2017年	2016年
1	台湾・タイ・フィリピン・ベトナム	タイ・フィリピン・ベトナム	タイ
2			ベトナム
3			フィリピン
4		香港	シンガポール・マレーシア
5	マレーシア	台湾	マレーシア
6	香港	マレーシア	香港
7	インド・シンガポール	インドネシア・ロシア	台湾・インド
8			
9	インドネシア	インド	インドネシア・ブラジル
10	イタリア	シンガポール	ル

6 ◇ジャパンプランド調査2017 (2017年2～3月実施)

・20カ国・地域：中国 (グループA=北京, 上海, 広州, グループB=深圳, 天津, 重慶, 蘇州, 武漢, 成都, 杭州, 大連, 西安, 青島), 香港, 台湾, 韓国, インド, シンガポール, タイ, インドネシア, マレーシア, ベトナム, フィリピン, オーストラリア, アメリカ (東海岸・西海岸), カナダ, ブラジル, イギリス, フランス, ドイツ, イタリア, ロシア

◇ジャパンプランド調査2016 (2016年4～5月実施)

・20カ国・地域：中国 (北京, 上海), 香港, 台湾, 韓国, インド, シンガポール, タイ, インドネシア, マレーシア, ベトナム, フィリピン, オーストラリア, アメリカ, カナダ, ブラジル, イギリス, フランス, ドイツ, イタリア, ロシア

また、同調査では「日本への好意度が高い人の方が、好意度が低い人に比べてSDGs認知率は高いことから、今後日本企業が海外展開するにあたり、「SDGs」が重要な視点となることが明らかになった。」としている。相互理解と信頼に基づくパートナーシップには友好関係を欠くことはできない。上の調査結果を見る限り欧米よりも東アジアにおいてSDGsに基づく教育を展開してゆく可能性があるのは台湾・タイ・フィリピン・ベトナムであろうことが窺える。そして、本学では2022年よりフィリピンの大学との提携による語学留学プログラムの開始を踏まえれば、本学にとってフィリピンが語学力とともにSDGsを学ぶ最も適切な国であることは間違いないであろう。

3 育成したい人材像

2020年9月26日に開催されたEDIX 関西において、安西祐一郎氏⁷が「AI戦略と大学教育：今後の展望」と題する基調講演をされたのを拝聴した。そこで安西氏はAIの発達を想定して理数教育の必要性を説いていた。そのことを強く説く理由としては、大学は10年、20年先の大きく変わる社会を想定してその社会で活躍できる人材を育成する責任があるということであった。安西氏の言には非常に共感するところがあった。4年間の教育課程で何を身に付けさせ、卒業させるかではない。生涯にわたって大学で身に付けた知識技能が生かせる、そのような教育課程を大学は志向しなければならないと考える。

10年、20年先の社会の変化というのは、科学技術に限ったことではない。国際社会が今後どのように変化してゆくのかということについても昨今の情勢を鑑みると極めて不透明であるといわざるを得ない。しかしながら、そのような社会であっても相互理解と信頼に基づいて生き抜いてゆく人材を育成することも大学の責任であろう。

SDGsの目標は2030年を期限とするもので、まずはその目標に向けた人材を育成することが一つの方向性であると考えている。そこで、SDGsの目標と本学の学科構成との親和性について検討した試案が以下のものである。まずはSDGsの17の目標を掲げる。

SDGsの17の目標

- 目標1（貧困）あらゆる場所のあらゆる形態の貧困を終わらせる。
- 目標2（飢餓）飢餓を終わらせ、食料安全保障及び栄養改善を実現し、持続可能な農業を促進する。
- 目標3（保健）あらゆる年齢のすべての人々の健康的な生活を確保し、福祉を促進する。
- 目標4（教育）すべての人に包摂的かつ公正な質の高い教育を確保し、生涯学習の機会を促進する。
- 目標5（ジェンダー）ジェンダー平等を達成し、すべての女性及び女児の能力強化を行う。
- 目標6（水・衛生）すべての人々の水と衛生の利用可能性と持続可能な管理を確保する。
- 目標7（エネルギー）すべての人々の、安価かつ信頼できる持続可能な近代的エネルギーへのアクセスを確保する。
- 目標8（経済成長と雇用）包摂的かつ持続可能な経済成長及びすべての人々の完全かつ生産的な雇用と働きがいのある人間らしい雇用（ディーセント・ワーク）を促

7（独）日本学術振興会顧問／内閣府 人工知能戦略実行会議座長

SDGs を基盤とする教育課程の構築について

進する。

- 目標9 (インフラ, 産業化, イノベーション) 強靱 (レジリエント) なインフラ構築, 包摂的かつ持続可能な産業化の促進及びイノベーションの推進を図る。
- 目標10 (不平等) 各国内及び各国間の不平等を是正する。
- 目標11 (持続可能な都市) 包摂的で安全かつ強靱 (レジリエント) で持続可能な都市及び人間居住を実現する。
- 目標12 (持続可能な生産と消費) 持続可能な生産消費形態を確保する。
- 目標13 (気候変動) 気候変動及びその影響を軽減するための緊急対策を講じる。
- 目標14 (海洋資源) 持続可能な開発のために海洋・海洋資源を保全し, 持続可能な形で利用する。
- 目標15 (陸上資源) 陸域生態系の保護, 回復, 持続可能な利用の推進, 持続可能な森林の経営, 砂漠化への対処, ならびに土地の劣化の阻止・回復及び生物多様性の損失を阻止する。
- 目標16 (平和) 持続可能な開発のための平和で包摂的な社会を促進し, すべての人々に司法へのアクセスを提供し, あらゆるレベルにおいて効果的で説明責任のある包摂的な制度を構築する。
- 目標17 (実施手段) 持続可能な開発のための実施手段を強化し, グローバル・パートナーシップを活性化する。

SDGs の17の目標と学科の特性を鑑み親和性があると考えるのは, 以下の組み合わせであろう。

教育学部	教育学科	目標4 (教育)
人間科学部	人間福祉学科	目標3 (保健), 10 (不平等)
	心理学科	目標5 (ジェンダー), 10 (不平等)
	人間栄養学科	目標2 (飢餓)
	グローバルコミュニケーション学科	目標17 (実施手段)

本学における各学科の人材育成目標と比較的親和性のあると考える目標を設定したが, 特に説明を必要とするのはグローバルコミュニケーション学科であろう。コミュニケーションはもちろん, 社会に関わる様々な領域を専門とする学科の特性から言えば全ての目標に少しずつ関わっているといえ, 特に目標を絞り込むことが困難であるように思える。しかし, 上に掲げた目標17は全てを包括するための手段, つまりコミュニケーションと読み取ることができ, コミュニケーションこそが相互理解と信頼の基礎となることを考えれば目標17として良いのではないかと考える。

次に, 学科の専門性にかかわらず広く SDGs に関わる知識技能を修得することができるのは, やはり教養教育科目である。そこで, 試案として SDGs の17の目標に基づき想定することのできる科目について検討した。なお, 科目名称は A 案と B 案とがあり, それぞれ「-論」と「-と-」という形式としている。

表中の科目名称案の中には, 詳細については省略をするが, 既に本学以外の大学に於いて実際に開講されているものがある。すべての目標に対応しようとすれば, 上のような科目が考えられるが, 既に大学で開講している科目があるのであれば, シラバスを検討すれば SDGs の目

目標	一論 (A 案)	一と一 (B 案)
1. 貧困をなくそう	生活経済論	生活と経済
2. 飢餓をゼロに	食料流通論	社会と栄養事情
3. すべての人に健康と福祉を	健康福祉論	社会福祉と健康
4. 質の高い教育をみんなに	社会教育論	社会と教育
5. ジェンダー平等を実現しよう	国際ジェンダー論	国際関係とジェンダー
6. 安全な水とトイレを	公衆衛生論	社会と公衆衛生
7. エネルギーをみんなにそしてクリーンに	エネルギー環境論	エネルギーと環境
8. 働きがいも経済成長も	労働環境論	社会と労働環境
9. 産業と技術革新の基盤をつくろう	産業社会論	社会と産業技術
10. 人や国の不平等をなくそう	格差社会論	国際社会と格差
11. 住み続けられるまちづくりを	住環境論	社会と住環境
12. つくる責任 つかう責任	消費者行動論	環境と消費
13. 気候変動に具体的な対策を	自然環境論	国際社会と気候変
14. 海の豊かさを守ろう	海洋生物資源論	環境と海洋資源
15. 陸の豊かさも守ろう	地球環境論	環境と陸上生態系
16. 平和と公正をすべての人に	国際平和論	国際社会と平和
17. パートナリシップで目標を達成しよう	国際関係論	国際社会と SDGs

標にあわせることは可能であると考え。また、表中の科目には大学によっては専門教育科目として開講しているものもあるので、教養教育科目との履修系統によっては SDGs のコース設定も可能ではないかと考える。

4 最 後 に

「私は地方の学校で一生教員を続けるので、英語は必要ありません」「都市部では外国人と関わることもあるでしょうが、私の住む地域にはそもそも外国人がいません」このように言う学生に、よりグローバルな視点から社会に目を向け課題を解決しようとする人材を育成すれば良いのか。それは、SDGs の精神を理解し、次世代へと繋いでゆくこと、そして自らの社会的な役割、職業の意義を理解することによって自己の存在価値を自覚できるということが SDGs に基づく教育課程の意義である。

また、フィリピンの社会状況と日本のそれとを比較して単純に「豊かさ」の評価をしてはならない。フィリピンの社会事情を通して私たちが学ぶべきことは数多くあるはずである。学生達が生き抜いてゆく日本社会がますます豊かになってゆくためには現在ある課題を見だし自ら解決をしてゆこうとする能力である。このような能力を育成するためには、SDGs の目標は高等教育にとって優れた教材となるであろう。

残された課題としては、留学を大学においてどの程度重要な教育課程として位置づけるかである。具体的には科目の繰り出し、必修・選択の別等々である。この判断基準としては、SDGs を本学の教育課程にどのように位置づけるかということと深く関わる。

SDGs を基盤とする教育課程の構築について

早急に取り組めることとしては、SDGs の目標に関連する内容の授業のシラバスにおいて、関連を示す文言或いは記号を盛り込むことが考えられる。

—2022年 2 月 4 日 受理—